簡易第四讀本

興文社編

178
1
24

館書籍教育會日本

二四函
三架
九一號
六册

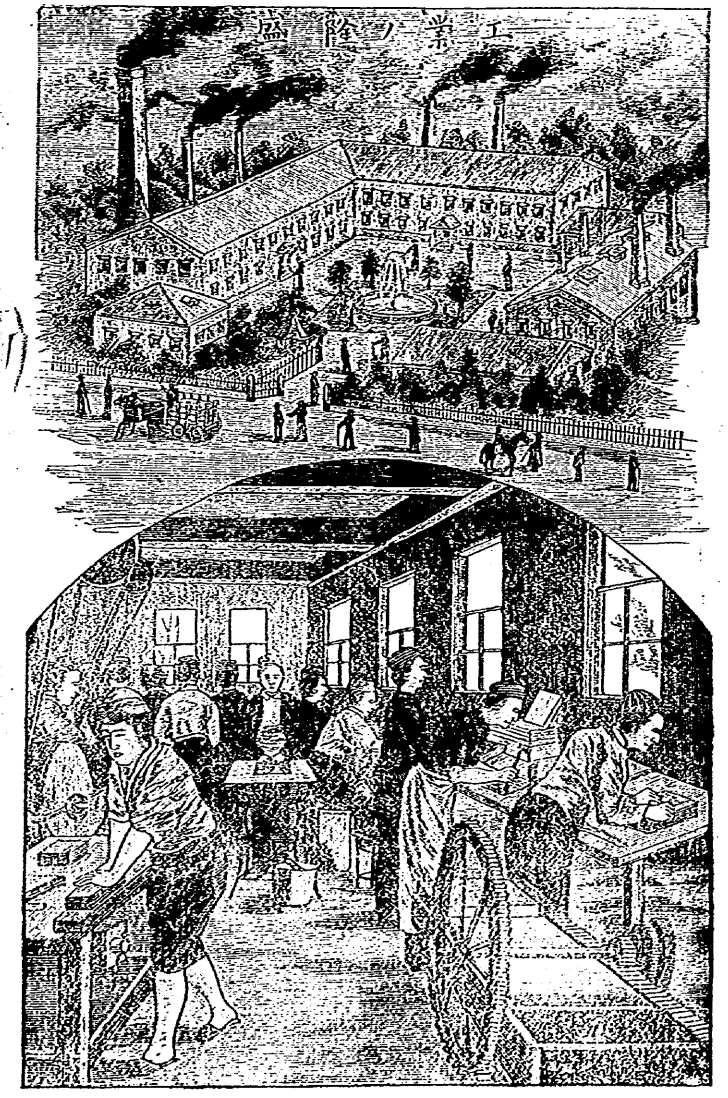
検定申請本

K120.8
41
4

K120.8
41
4

東京興文社

No.10541



簡易第四讀本

第一　親族

汝ガ父母ノ父ヲ何トイフカ。祖父トイフカ。祖母トイフナリ。汝ガ父母ノ母ヲ何トイフカ。祖母トイフナリ。汝ガ父母ノ兄弟ヲ何トイフカ。伯父、叔父トイフナリ。汝ガ父母ノ姉妹ヲ何

トイフカ。　伯母、叔母トイフナリ。
汝ガ祖父母ハ、汝ヲ指シテ、何ト呼バルルカ。　孫ト呼バルルナリ。　汝ガ伯叔父母ハ、汝ヲ指シテ、何ト呼バルルカ。　吾男ナレバ、甥ト呼バレタリ。若シ女ナラバ、姪ト呼バルルナラン。　然リ、汝ガ言ノ如シ。　汝ハ、汝ガ

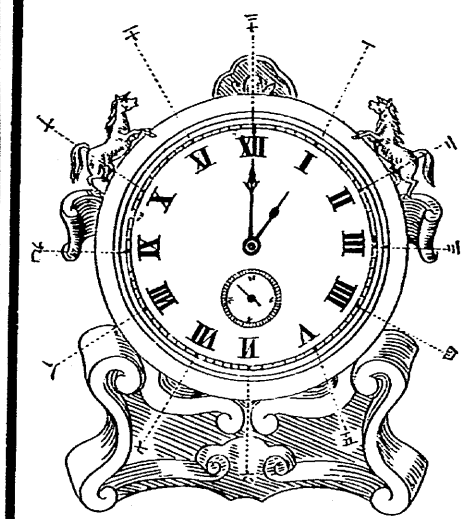
親族ヲ大切ニセヨ。

祖父。祖母。伯父。叔父。伯母。叔母。甥。若。姪。言。
親族。大切。

第二　時計

汝い、一時間の分ちかゝを知きりや。
六十分ゝ分つあり。　汝は、一分間の分ちかゝ知れりや。　六十秒に

分つなり。　此の時計の面ふ見にたる三つの針い何ぞるの。　長き針い、時を指し、短き針は、分を指し、小さき針は、秒を指したるものにして、各右より左に廻り、長き針の一時間を廻る間



にい、短き針と、六十分間を廻り、短き針は一分間を廻る間ふい、小さき針は、六十秒間を廻るぞり。　さまば、此の三つの針の廻るを見く、今い何時何分何秒ぞふこと を知る屋し。　此の時計は面ふ見えたる十二のぞるしい、何ぞるの。　これと、羅馬數字と

て、即ち一時より十二時までを示したるものなり。

秒。時計。迴。羅馬數字。郎。

第三　音ト訓

父ハ、太郎ニ向ヒテ、汝ガ知リタル一ヨリ十マデノ文字ニ片假名ヲツクベシトイヒケレバ、太郎ハ直チニ文字ノ右ノ方ニ左ノ如クツケタリ。

一(イチ)二(ニ)三(サン)四(シ)五(ゴ)六(ロク)七(シチ)八(ハチ)九(ク)十(ジフ)

次ニ次郎ニ向ヒテ尚ホ此ノ外ニ變リタル讀方アラン、汝ハ之ヲ平假名ニテ左ノ方ニツクベシトイヒケレバ、次郎ハ暫ク考ヘテ、左ノ如クツケ

タリ。

一二三四五六七八九十
ひとつ ふたつ みつ よつ いつつ むつ なな やつ ここのつ とを

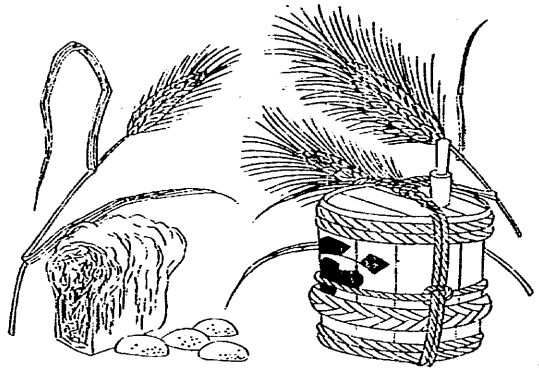
父ハ之ヲ見テ、イヅレモ善シト譽メテ、サテ曰ク、漢字ノ讀方ハ、一字ゴトニ音ト訓トノ二ツアリ、音トハ、文字ノ讀聲ニシテ、訓トハ、文字ノ意味ナリ、此ノ二ツヲバ、能ク覺ユベシト教ヘテ、更ニ左ノ七字ノ右ノ方ニ音ヲツケ、左ノ方ニ訓ヲツケテ示シタリ。

天地（テンチ）。 あめつち
山川（サンセン）。 やまかは
松竹梅（シヨウチクバイ）。 まつたけうめ

直。尚。讀方。暫。考。譽。曰。音。訓。意味。教。更。

第四　米と麥

米よい、粳と糯とがある。　粳は、炊きて飯とかし、糯は、搗きて餅となる。　其の早く實るものをわせと云ひ、晩く實るものをおくてといひ、わせとおくてとの間に實るものを中なかてといふ。　麥ふは、大麥あり、小麥がある。



大麥も亦炊ぐべく、又い、味噌醤油かど材作るに用ふ。　小麥は、輓きて粉とかして、ぱん、うどん、さうめんなどを製す。　麥は、畑ふ作り、米は、田にも畑ふも作る。　畑ふ作り

たる米を、をこぼと叫ぶ。

粳。糯。炊。飯。搗。餅。晩。大麥。小麥。味噌。醬油。粉。製。

第五　豆

豆ニハ、大豆アリ、小豆アリ。　味噌、醬油、豆腐ヲ作ルニハ、大豆ヲ用ヒ、餡ヲ作ルニハ、小豆ヲ用フ。　豆ノ種類ハ、甚ダ多クシテ、豌豆、蠶豆、ササゲ、フヂマメナド、孰レモ畑ニ作ルモノナリ。

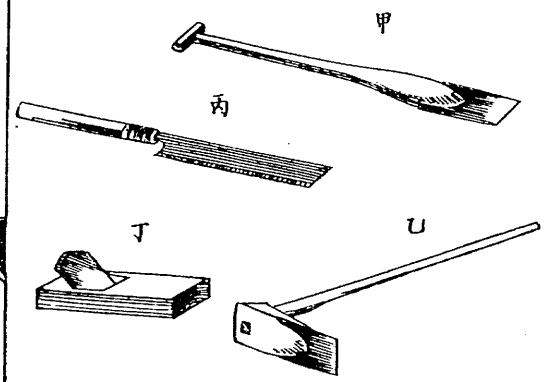
穀物ノ中ニテ、米、麥、豆ハ、最モ人ノ需用多シ。　此ノ外、粟、稷ナドモ、亦食料ニ供

スベシ。

大豆。小豆。豆腐。餡。豌豆。蠶豆。孰。穀物。需用。粟。稷。食料。供。

第六　四つの道具

此の處に四つの道具あり。甲は、何なるか。鋤なり。乙は、何なるか。丙は、何なるか。鋸なり。



丁は、何なるか。鉋なり。鋤は、何ふ用ふるものか。土を掘るに用ふるものなり。鍬は、何に用ふるものか。土をかへしふ用ふるものなり。鋸は、何に用ふるものか。木材引き

割るゝ用ふるものなり。鉋は、何に用ふるものか。木を削るゝ用ふるものなり。汝ら、物乃名と用方とを能く覺えたり。一つの物を見るときは、必ず其の名と用方とを試さとるべし。

道具。甲。鋤。乙。鍬。丙。鋸。丁。鉋。掘。引。割。削。用方。必。

第七　茶

今、此ノ男子ハ、座敷ニテ茶ヲ入レントス。此ノ茶ハ、何ヲ製シタルモノカ。今、彼ノ女子ハ、茶園ニテ茶ノ樹ノ葉ヲ摘メリ。此ノ葉ハ、何ニ供スルモノカ。此ノ男子ノ入レントス

ル茶ハ、茶ノ樹ノ葉ヲ製シタルモノナリ。彼ノ女子ノ摘メル茶ノ樹ノ葉ハ、人ノ飲料ニ供スルモノナリ。汝ハ製茶ノ方法ヲ知レリヤ。茶ヲ製スルニハ、此ノ摘ミ採リタル葉ヲ、蒸籠ニ盛リテ、蒸シタル後ニ、焙爐ニ懸ケテ、焙リナガラ、能ク揉ミ上グルナリ。

座敷。茶園。樹。摘。採。飲料。方法。蒸籠。盛。焙爐。揉。

第八　本のかりかし

金助ハ、銀藏に本を借らんとて、左の

手紙を贈りたり。

簡易第四讀本法明きふ法師は
はゞ両三日の間拝借致したく候
月　日　金助
銀藏様

銀藏い、直ちに左の返事を認めて、書籍と共に使の人に渡したり。

仰のごとく簡易第四讀本差上候間御覧下さるべく候
月　日　銀藏
金助様

金助は、深く喜びて、次の日は夕方にたに讀み終りて、速に之を返したり。

金助。銀藏。借。贈。両。拝借。致。様。認。共。仰。

差上。覽。喜。終。速。返。

第九　前のはづき

此の本を返し來りし時に銀藏い不在ありけまで、其の弟ゝ鐵作はふろしき包を受け取りて見るゝ本に添へたる左乃手紙なり。

貴大切の貴本長長拜借ありがとう

くなど候乃ち返上致し度間貴

受け取りくださるたくゝ

月　日　　金助

銀藏樣

鐵作い、此手紙と本とを兄の机の上ゝ置き左の受取書を認めて、使の人に渡しゝり。

記

一 佐手紙　一通

一 本　一冊

右の通正ニ受け取り候也

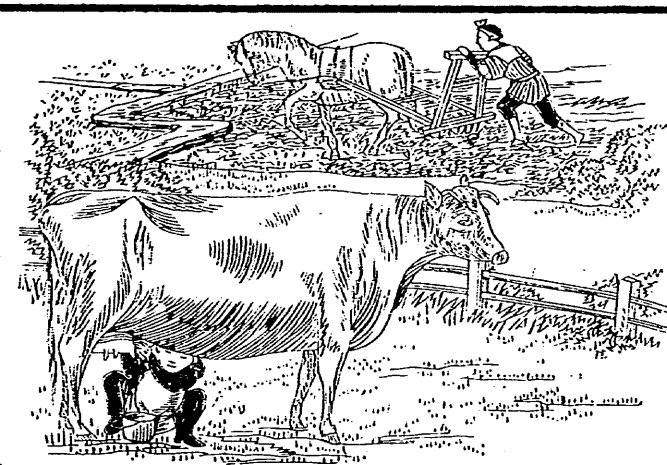
月　日　銀蔵代　鐵作

金助様

不在。鐵作。包。添。存。乃。机。受取書。通。冊。正。也。代。

第十　馬ト牛

人ノ家ニ畜ハルル獸アリ。野山ニ棲ム獸アリ。野山ニ棲ム獸ヲ野獸トイヒ、人ノ家ニ畜ハルル獸ヲ家畜トイフ。家畜ノ中ニテ、馬ト牛トハ、最モ人ニ用アルモノナリ。馬ハ荷物ヲ負ハセ、車ヲ輓カセ、騎乘ニ供シ、



耕作ニ用フ。牛ノ肉ト乳トハ、最モ好キ滋養物ニシテ、皮ハ靴ニ製シ、角ハ彫物ニ供シ、筋、骨マデモ棄タルルモノナシ。其ノ力甚ダ強キガ故ニ、重キ荷物ヲ運搬セシム。

畜。獸。野。棲。負。騎乘。耕作。肉。滋養物。靴。角。彫物。筋。骨。棄。力。故。運搬。

第十一　蠶

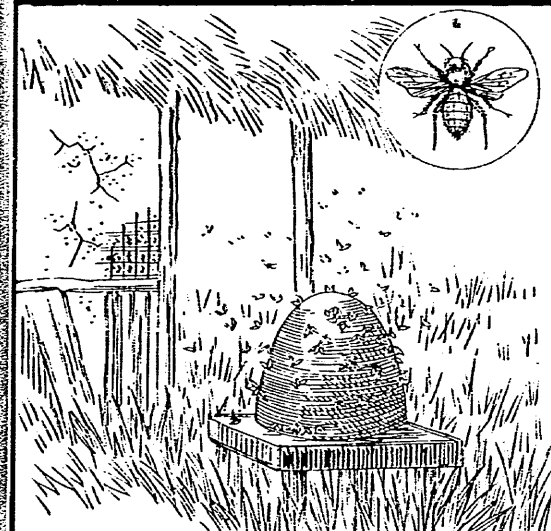
此の處は、養蠶場かるべし。數多の女子い、蠶ふ桑の葉を與へて、甚だ忙し。蠶には、春飼ふものと、夏飼ふも

のとあり。春飼ふものを
はるごと以ひ、夏飼ふを
のをなつごといふ。
此の蟲は、桑の葉
を食ひて、巣を造
るなり。其の造
りなる巣を繭と

いひ、繭を煮て繰りたるものを生絲
と以ひ、生絲ふて織りたるものを絹
布といふ。又蠶は卵を産みつけた
る紙あり。之を蠶卵紙又は種紙と
以ふ。

養蠶場。數多。桑。與。忙。巣。繭。煮。繰。生絲。
織。絹。蠶卵紙。種紙。

第十二　蜜蜂

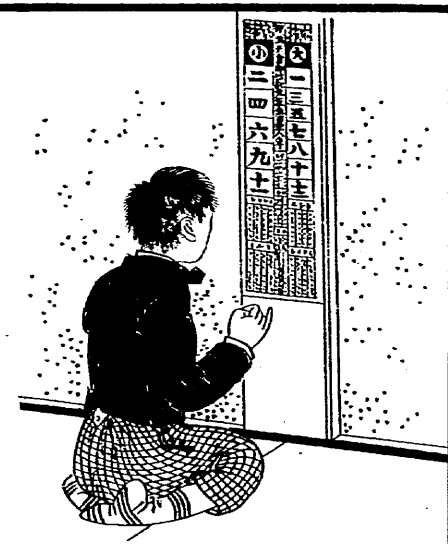


此ノ家ニハ、蜜蜂ヲ養ヒタリ。此ノ蟲ハ、一群ノ中ニ、必ズ王蜂ト守蜂ト工蜂トノ三種アリテ、王蜂ハ、一群ヲ支配シ、守蜂ハ、巣ヲ守リ、工蜂ハ、野山ニ出デテ、花ノ汁ヲ吸ヒ取リ、巣ニ歸リテ、蜜ヲ釀ス。此ノ釀シタル蜜ハ、藥用ニ充テ、或ハ食用ニ供ス。又此ノ蜜及ビ巣ニテ蠟ヲ製スベシ。

蜜蜂。群。王蜂。守蜂。工蜂。支配。汁。吸。釀。藥用。充。蠟。

第十三　年

汝い、一年乃日數を知きりや。　一年の日數い、三百六十五日ふして、四年目ふ一日を增す。　此の一日を增したる年ぱ閏年といひ、其の餘ぱ年を平年といふ。　汝は、一年の月數を知きりや。　一年の月數ぱ、十二箇月ふり。　汝は、一月ぱ日數を知れりや。　一月、三月、五月、七月、八月、十月、十二月は、月ごとふ三十一日にして、四月、六月、九月、十一月い、月ごとに三十日ふり。　只二月のみぱ、二十八日にして、閏年ふい、二十九日とぱ。　此の一、三、五、七、八、十、十二乃七箇月を大の月と



いひ、其の餘の月を小の月と云ふ。　柱に張りたる暦を見よ。

増。閏年。餘。平年。箇。只。柱。張。暦。

第十四　人ノ一生

此ノ一年ノ中ニ春夏秋冬ノ四季アルコトハ、汝既ニ知リタルナラン。人ノ一生ヲ四季ニ譬フレバ、幼キ時ハ春ノ如ク成長シタル時ハ、夏ノ如ク、稍衰ヘタル時ハ、秋ノ如ク、老イタル時ハ、冬ノ如シ。　春ト夏トニ勉強セザレバ、秋ニ至リテ其ノ功ナク、冬ニ至リテ歎クトモカヒナシ。　サレ

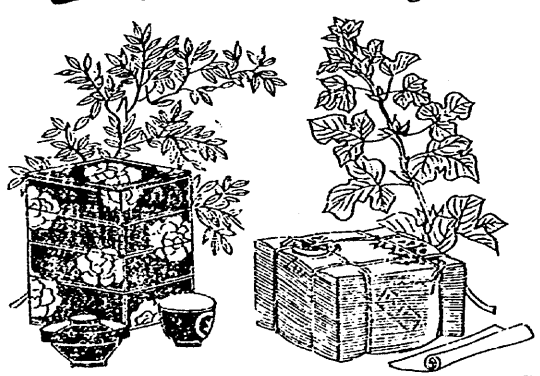
バ、一年ノ計ハ春ニ在リ、一生ノ計ハ幼キ時ニ在リトイヒテ、幼キ時ヲ最モ肝要トセリ。汝只今幼シトテ、少シモ油斷スベカラズ。時ハ、汝ヲ待タズシテ去ルベシ。

譬。幼。成長。稍。衰。勉强。功。歎。肝要。油斷。待。去。

第十五　楮と漆

吾ゲ家の園には、楮と漆とを植ゑたり。楮い、幹を伐り、皮を剝ぎて、紙を造るに用ひ。

漆は、樹の皮に傷をつけて、其の口ゟり流れ出づる汁を取り、之を製し



て塗物ふ供ゑ。此の塗物の上ふ金をもて種種の摸樣を描きたる、蒔繪とはいふなり。

楮。漆。植。幹。伐。剝。傷。塗物。摸樣。描。蒔繪。

第十六　麻ト綿

吾ガ家ノ畑ニハ、麻ト綿トヲ作リタリ。麻ハ、刈リ取リテ莖ノ皮ヲ剝ギ、

紡ギテ絲トナシ、織リテ布トナス。綿ハ、實ヨリ吐キタル綿ヲ取リテ、衣服ニ入レ、又ハ紡ギテ絲トナシ、織リテ布トナス。麻絲ニテ織リタルヲ麻布トイヒ、綿絲ニテ織リタルヲ木

綿トイフ。綿ノ種ハ、搾リテ、油ヲ製スベシ。

麻。綿。莖。紡。吐。木綿。搾。

第十七　砂糖と鹽

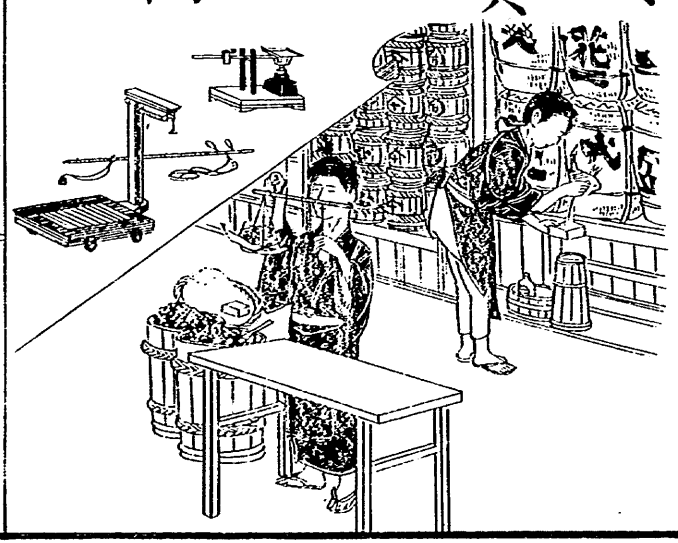
砂糖と鹽とは、飲食物の味をつくるに缺くべからざるものなり。砂糖ハ、重に甘蔗といふ草の莖を搾りて、其の汁を煮つめて製す。鹽は、海水より取るものと、地中より掘り出すものとあり。吾が國ハ、海水より取るもの多し。其の取方

は、暑き日ふ、海水を汲みて、砂地ふ灌ぎかけ、鹽の固まりつきたるを掻き寄せて、之を漉して煮つむるなり。此の砂地をバ、鹽田と云ふ。

鈌。甘蔗。砂地。灌。固。掻。寄。漉。鹽田。

第十八　秤

此ノ酒見世ニテハ、酢、味醂、味噌、醤油、鹽ヲモ商ヘリ。酒、酢、味醂、醤油、鹽ハ、枡目ニテ賣レドモ、味噌ハ、目方ニテ賣レリ。物ノ目方ヲ量ルニハ、秤ヲ用フ。汝ハ、秤ノ目ノ稱ヲ知レリヤ。一分



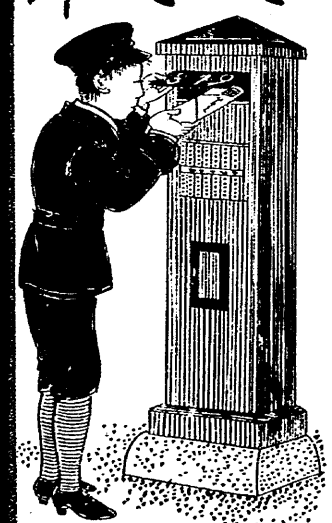
ヲ十ニテ一匁トイヒ、一匁ヲ十ニテ十匁トイヒ、十匁ヲ十ニテ百目トイヒ、百目ヲ十ニテ一貫目トイフ。又百二十目或ハ百六十目ヲ一斤トイフ稱アリ。秤ノ種類ニハ、皿秤アリ、臺秤アリ。今、此ノ男ハ、皿秤ニテ、味噌ノ目方ヲ量レリ。

酒見世。酢。味醂。商。目方。秤。匁。貫目。斤。皿秤。臺秤。

第十九　郵便

此の子は、只今、狀袋の上ゝ郵便切手を貼りて、郵便函ゝ入れんとす。此の手紙は、定めて名あてゝ家に届くからん。郵便乃配達人は、數多の手

紙をそれ程きよ配達せるものかれば、郵便を出すふも受くるにも、善く其の便利を謀るべし。郵便を出せるものは、差出人と受取人との姓名住所をたしかふ書きて、配達人の惑はざるやうふせべく、郵



便局受くるものは門口ふ郵便といふかけ聲を聞かば、直ちよ出でて受け取りて、配達人を待たせぬやうふせべし。

狀袋。郵便。切手。貼。郵便函。定。屆。配達人。便利。謀。差出人。受取人。住所。惑。門口。

第二十　新聞紙

大阪ノ或ル町ニ住ム義雄ノ家ノ門口ニ郵便トイフカケ聲ノ聞エケレバ、義雄ハ、直チニ出デテ見ルニ、東京ヨリノ新聞紙ヲ配達シ來レリ。開キテ之ヲ讀ムニ、左ノ一條アリ。

昨夜何時何區何町何番地より出火家數三十戸程燒失せり

新聞紙ハ、日日ノ出來事ヲ記載シタルモノニテ、官令アリ、論説アリ、電報アリ、雜錄アリ、投書アリ、廣告アリ、人ノ必ズ見ルベキモノナリ。

大阪。義雄。東京。新聞紙。條。區。番地。戸。程。

燒失。記載。官令。論說。電報。雜錄。投書。廣告。

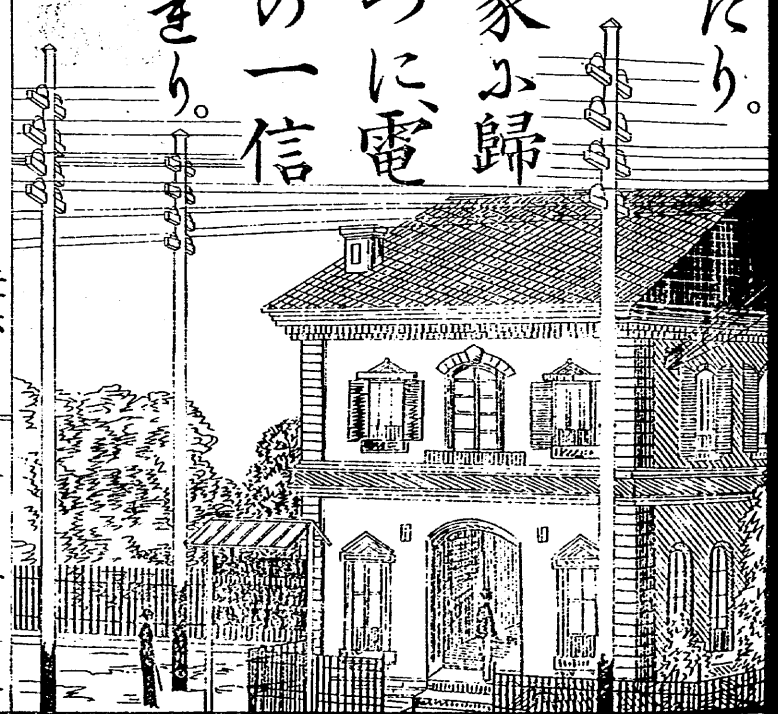
第二十一　電信

義雄い、今、此の新聞紙を讀みて、大ふ驚きたり。　義雄の友ふる貞夫は、昨夜燒けたりとゆる東京ゝ何町に住めば、安否乃程も覺束ふしと思ひて、直ちふ近傍の電信局ふ至りて、左の一信を發したり。

ヤケシカ

斯くて、其の家ふ歸りて暫く待つに、電信局より左の一信を配達し來きり。

ヤケヌ



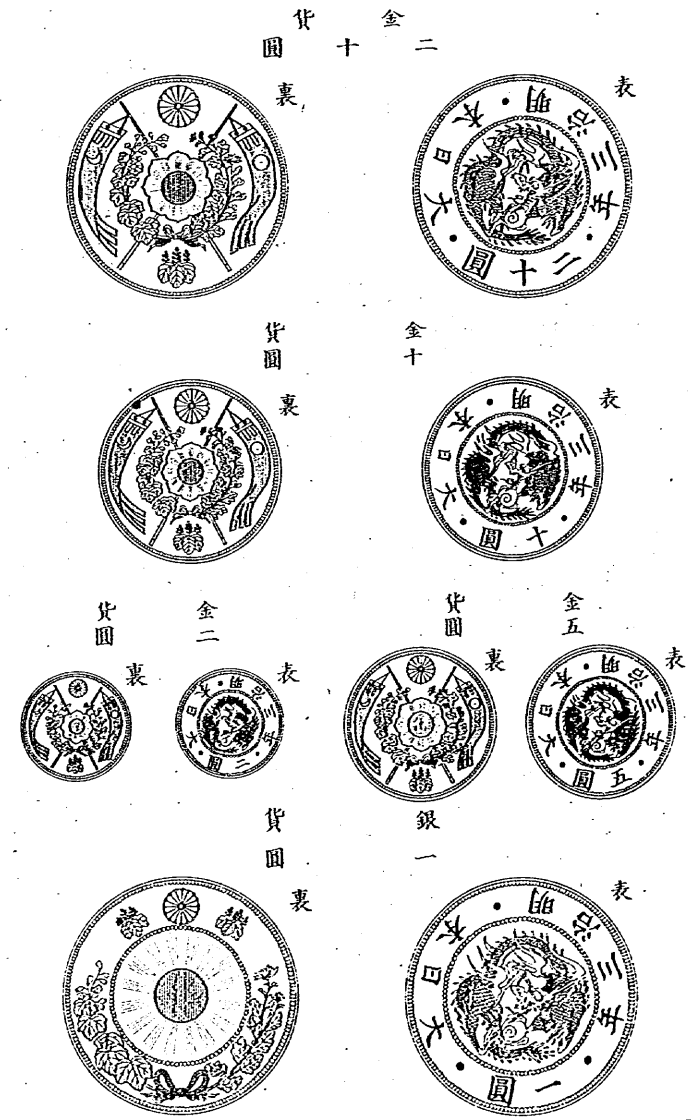
ふれい、義雄は見舞ふ對して、貞夫のかたより發ふたる返事なり。僅に四字乃片假名ふて問へば、忽ち三字の片假名ふて答ふ。電信は、實ふ便利ならずや。

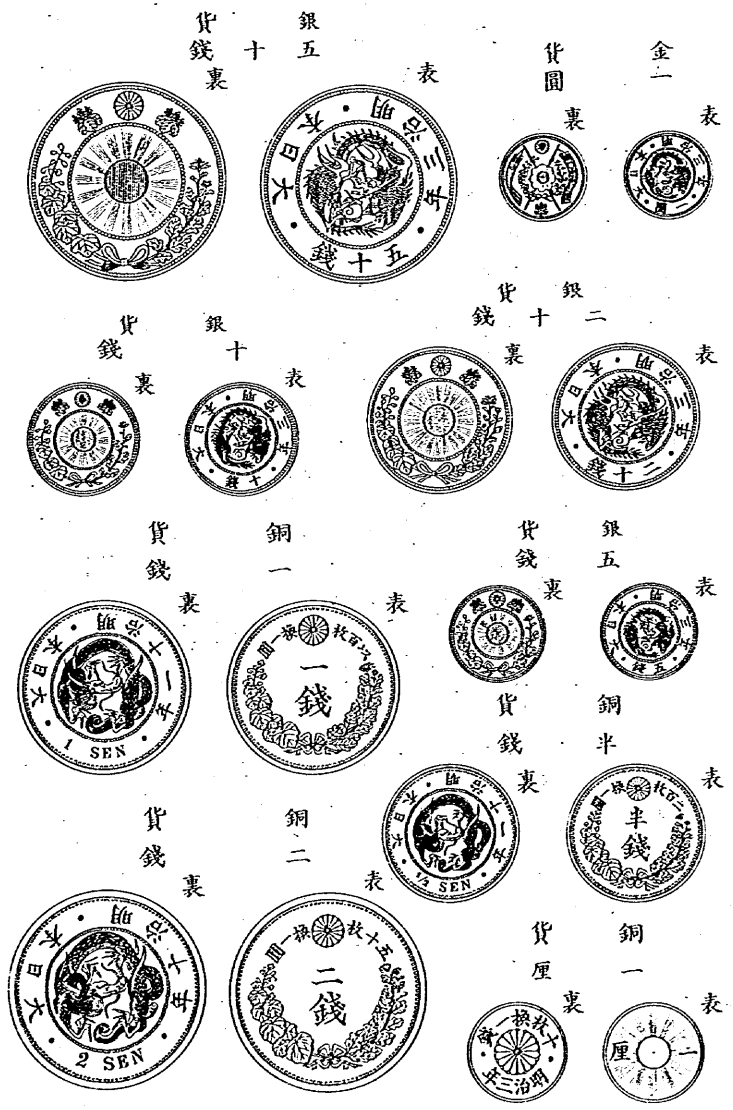
驚。貞夫。安否。覺束。思。近傍。電信局。發。斯。見舞。對。僅。問。忽。答。

第二十二　貨幣

物ヲ賣ルニハ、代價ヲ受ケ、物ヲ買フニハ、代價ヲ拂フ。此ノ代價ニハ、貨幣或ハ紙幣ヲ使用スルナラン。サレバ、貨幣ハ、物ノ賣買ノ媒トナルモノニシテ、紙幣ハ貨幣ノ代リニ用フルモノナリ。貨幣ニハ、金、銀、銅ノ三

種アリテ、銅ノ一種ヲ錢トイフ。汝ハ貨幣ノ稱ヲ知レリヤ。一厘ヲ十ニテ一錢トイヒ、一錢ヲ十ニテ十錢トイヒ、十錢ヲ十ニテ一圓トイフ。銅貨幣ニハ、一厘、半錢、一錢、二錢ノ四種アリ。銀貨幣ニハ、五錢、十錢、二十錢、五十錢、一圓ノ五種アリ。金貨幣





二ハ、一圓、二圓、五圓、十圓、二十圓ノ五種アリ。又紙幣ニハ、二十錢、五十錢、一圓、二圓、五圓、十圓、二十圓、五十圓、百圓等ノ數種アリ。紙幣ハ、紙ニテ造リタルモノナレバ、遠キ處ニ持チ行クニハ、貨幣ヨリモ便利ナルベシ。

代價。拂。貨幣。紙幣。媒。銅。厘。錢。圓。等。遠。持。

簡易第四讀本終

版權登錄

簡易第四讀本

東京興文社

明治二十一年六月六日印刷
同　年同月廿一日出版

定價六錢

編者　東京馬喰町二丁目一番地　興文社

發行兼印刷者　東京府平民　石川活三　日本橋區馬喰町二丁目一番地

國民の教育發行所　東京馬喰町二丁目一番地　興文社

發兌　同　石川教育書房